

革工芸ワークショップ 富岡ネム

第四十一回展では昨年に引き続き、好評だった革のワークショップを開催しました。今年は何を作ろうと早期から山崎委員と相談し、試作品を持ち寄り検討しました。そこで決めたのが「世界にただ一つの薔薇のブローチ」です。当然のことながら美術館の中でずから厳しい制約があります。

周囲を大事な展示作品に囲まれた空間に机を並べて作業する、音は小さく、水撥ね厳禁、染料は駄目、展覧会鑑賞者の邪魔にならない様に、等々。気を遣います。それでも、あらあら不思議、あら不思議。革と言うと扱いが面倒、素人には取り付き難い、など身近な存在であるにも関わらず敬遠しがちな素材です。それが革の特性を活かした、いたってシンプルな、しかもゴージャスなブローチに早変わりするのです。



大勢の参加者で大盛況のワークショップ



見事に仕上がった参加者の作品

三十人限定の整理券を作って下さった委員さん(あつと)という間に三十枚無くなり、追加分の材料も使い切りしました。机や椅子の運搬、事前のPR等、その場にいた役員の協力のもと盛況裡に終了することが出来ました。

昨年からはじめた新日本美本展の活性化の為に出来る事から実行しよう、鑑賞者を巻き込んで作ることに楽しさ、魅力を知ってもらおう、まずは発信しよう。

四十一回展では絵画部の色彩講座もありました。本展終了後のアンケートによるとワークショップ開催を「知らなかった」とする会員や一般の方が多くいました。

本部執行部では宣伝しているのですがまだ二年目、周知には至らないのでしょうか。根気よく続けること、来年は何がどこから出るのかなと胸ふくらませるワークショップの出現に乞い期待。来年は何かかなア...

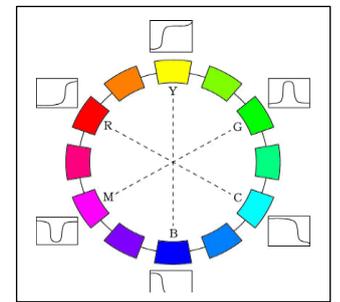
講演と実演 配色と混色

基本を知って、後は自分の感性を信じよう

十月三日、午後二時から本展の会場で、新日美委員の土屋政夫さんによる「色彩について」の講演が開催されました。少し

難しい話のようで敬遠されるかと心配されたのですが用意した二十客の椅子は、すぐに埋まり、七十人ほどの方々が熱心に聞き入っていました。

講演の内容は「光と色の三原色」「色環でみる補色」「配色と混合」などでした。見ていて心地よい絵にはそれなりの仕掛けがあることや、絵を描いていくと皆さん少なからず出くわす「濁り」や「ハレーション」もなるほど、そういうことか...と納得。



見本を示しながら実演中の土屋委員

絵の主調色を決めることと共に、補色の関係の色環で捉え調子を整えていくことの大切さを改めて認識させて頂きました。講演の後はアクリル絵の具と四号のキャンバスを使った「混色について」の実演です。例えば空の表現。水色と白の絵具を直接キャンバスに置き、ナイフや筆を使っての混色で、いくつもの違ったニュアンスの空が現れました。

恒例のギャラリートーク

実際には、絵具を生乾きの状態で重ねていくとマーブル状の表現が出来ますし、点描は絵具を混色せずに並べて置いていくことで目が混色してくれます」との説明に頷く人多し...。最後に「今日の話は絵を描くときのヒントです。どう描くかは自由ですが、実際に自分の目と体で体感してください。そして自分の感性を信じて、それが自分の個性ある絵を描くことに繋がります」と結びました。立見で参加されていて、絵は始めたばかりという方が、とても分かりやすくタメになったわ」と呟っていました。

九月二十八日・十月一日と二日間に亘り恒例の芳賀先生によるギャラリートークが行われました。年中行事となった芳賀先生



生みの解りやすく適切な講評は今年も大盛況でした。

第九室の一般応募者の作品を重点に、会員の作品まで講評を受けたい希望者が多く、今年も予定時間を大幅にオーバーしました。